

# 人工種苗の放流効果調査（出雲海域）

（栽培漁業事業化総合推進事業）

内田 浩・小草正道\*

## 1. 研究目的

出雲海域におけるマダイおよびヒラメの放流効果の検証と放流事業の普及啓発を目的とする。なお、この調査は出雲海域だけでなく、全県で調査が実施され、本場が石見海域を、栽培漁業センターが隠岐海域の調査を行う。また、各海域で島根県水産振興協会および各水産事務所、水産課と共同で調査が行われている。

## 2. 研究方法

漁獲統計調査の対象は美保関町漁協から大社町漁協までの出雲海域7漁協である。市場調査は、マダイとヒラメを漁獲する各漁業種類を対象として、恵曇漁協、境港魚市及び県漁連松江魚市で行った。また、過去の調査により体長等の組成が類似する漁業種類については、まとめて解析した。つまり、マダイでは 沖底、小底1種、釣り及び延縄 小底2種 刺網定置網の4グループとし、ヒラメでは 小底2種、 沖底及びその他の2グループである。なお、放流魚の確認は、マダイは鼻孔連結を、ヒラメは無眼側の黒化を肉眼観察により行った。

## 3. 研究結果

### (1) マダイ

市場調査により尾叉長14～71cmのマダイ2,190尾のマダイを測定した。漁獲の主体は低年齢群であり15～35cm程度の1～3歳が約90%を占めた。

鼻孔連結は20～54cmで20尾しか確認されず、放流時の鼻孔連結割合と調査時の放流魚出現率から放流魚混獲率は0.55%と推定された。これにより、当海域のマダイ総漁獲量は130トン、水揚げ金額1億1,232万円で、この内放流マダイは4トン、水揚げ金額は347万円と算定された。

### (2) ヒラメ

市場調査により256尾のヒラメを測定した。ヒラメの体長制限は全長30cm（小底2種のみ25cm）となっており、小底2種において体長制限より小型の個体も見られたが、漁獲の主体は30～50cmであった。放流魚は6尾確認され、漁業種類別の漁獲量と合わせて算定した結果、放流魚の混獲率は、1.6%と推定された。これらにより、出雲海域のヒラメ漁獲量は67トン、水揚げ金額は8,101万円で、このうち放流魚は2.2トン、水揚げ金額269万円と積算された。

漁獲量は前年並であり、近年低水準が続いている。

## 4. 研究成果

研究結果は、平成17年度市場調査担当者会議において報告されるとともに、(社)島根県水産振興協会を通じて関係漁業者に報告される。

\* (社)島根県水産振興協会